
ハンティング

森田霜浦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ハンティング

【Nコード】
N4223V

【作者名】
森田霜浦

【あらすじ】
パラレルワールドに似ているがまったく違う世界で行われている狩猟闘技会に参加することになった黒賀 紳

彼は人生つまらないと思っていたが
この狩猟闘技会での命を懸けた戦いで生きがいを感じこの狩猟闘技会
で戦う

エピソード

つまらない……………

この人生の何もかもがつまらない……………

毎日毎日同じことの繰り返し……………

朝起きては学校に行き勉強して帰宅……………

いつも通りのなんの変化もない日常、実に平凡な毎日

普通の人だったら平凡だからいいとか、それが幸せなんだと言ったりする

そんなの知るか、平和だろうが幸せだろうがつまらなすぎて息が詰まる

いつそ死んだっていいくらいだ

俺は周りの奴らがわからない

こんな、なんの変化もない日常でよく楽しく過ごしてられるな

いくら学年一位の成績をとっても、スポーツがめっちゃくちゃできても、不良やらチンピラやらと殴り合っても結局はつまらない

……あ！でも喧嘩してた時はマシだったな、でもすぐにつまらないくなった

刺激がなかったからだ

はあ……………

この際なんでもいい、このつまらない人生を変えてくれるような出来事でも起こらないかな

突然女の子が現れて

「私を助けて！」

なんて言っ てきてそれから敵が出てきてそいつらと戦う日々

なんてこと起こらないかな

とにかく刺激的なことが起こらないかと思っている

どうせそんなこと起こらないに決まってる

結局つまらない人生を死ぬまで送り続けるしかないんだ
ホント今からでも死のうかな・・・

こんなことを考えてる俺は

黒賀 紳

高校二年の普通だが普通じゃない男子高生だ

ホントに・・・

刺激たりね

第巻話 詰まらぬ日常と新たなる刺激の予感

ここは、とある高等学校のグラウンド

今は二年生がサッカーの授業で二チームに分かれてミニゲームをやっていた。

1人の生徒がボールを巧みに操り次々とそのボールを奪おうと突っ込んでくる相手ディフェンスを交わしていく

そしてシュート

ボールは綺麗にゴールへと入った

「だあああああ！またお前かよ！」

キーパーをやっていた生徒が声を張り上げた

「現役サッカー部キーパーからゴールなんて奪えるか？普通」

「いや・・・現役とかそんな関係ないと思うが・・・」

ゴールを決めた生徒が静かに言った

「しっかし、お前がうらやましいぜ」

「？　なんでだ？」

「だってお前、そんだけスポーツできて成績は学年トップ、こんな漫画の主人公みたいなことありえねーって」

「スポーツはやってたら自然と出来るようになるし授業だって先生の話聞いてノート取ってりやテストなんざ満点とれるし」

「でましたゝ、黒賀^{くろが} 紳君^{しん}のエリート発言！聴きました？みんなきま・・・」そこ！しゃべってないでポジションにつけ！ゲーム再

開するぞ！」

生徒がしゃべってる途中で先生の声がした。一同はダラダラとポジションについた、ポジションとはいっても、各々が勝手に勝手に完全に成り立っていない。

「おい、黒賀！次は止めてやるからな！」

「・・・・・・・・・・」

この黒賀と呼ばれた生徒は無言のままで相手の挑発には一切乗らなかった

いや

正確には、興味なさ過ぎて耳に入らなかったといった方がいいだろう。

授業が終わり教室に戻る

黒賀は着替え終わると席について頬杖をついて周りのみんなが楽しそうにしゃべっているのをただ眺めていた
そして溜息をついて

（よくこんなにも笑い合っているな・・・こんなつまらない世界で）

と思っていた

黒賀はこの世界で生きていることがつまらなくて仕方がなかっただから少しは世界観かわるかと思い、勉強では学年トップをとりスポーツは前々からかなり得意だったから大してなにもせずともこれまた学年で一、二を争う運動神経を持っていた

そしてそれでもつまらなかったため不良やら町のチンピラを相手に喧嘩までしていた

喧嘩をしているときはそれなりに楽しく思っていたが結局はつまらなくなりやめてしまった

もはやこの世界には黒賀の欲求を満たしてくれるものはない

（はあ、帰る）

黒賀は体調不良と偽って早退した

―自宅―

「あゝ、くつそ！」

黒賀は自分の部屋に入り鞆を乱暴に投げ捨てた、その衝撃で鞆が開き中身をぶちまけた。

しかし、黒賀はそんなことお構いなしにベッドに寝転がりつぶやいた。

「刺激がねえ・・・」

その時、突然黒賀の目の前に原因不明の光が

そしてその光は徐々に人の形へと変わり光が消えたときには1人の少女が立っていた

黒賀は驚いたがなんとかすぐに冷静さを取り戻した
この突然の少女の登場は黒賀に少しの期待を抱かせた
その期待とは、この少女の登場により今までと違う毎日が来るので
はないか
という期待

がしかし警戒はしている、なんせ、突然現れたのだから

「ねえ」

少女が口を開いた

「この世界で暮らしてつまらないと思ってる？」

黒賀にとつて当たり前のことを聞いてきた

当たり前故に答えるのは虫一匹踏み潰して殺すよりも簡単だった

「ああ、つまらない、つまらなすぎる」

黒賀は続けた

「こんな、なんの変化もない生活なんて息が詰まる」

少女は少し考えて言った

「私に付いてくる？」

（は？今付いてくると言った？何処にだ）

「今何処に付いていくのかと思っただでしょ？」

「！？」

（思考を読まれたのか！？なんなんだこいつ）

黒賀は警戒のレベルを上げた

「大丈夫だよ、別に読心術とかじゃないから」

これまた黒賀の思考を読んだかのような言い方

「いやいや、そんな睨まないでよ、なんでこんなこと分かるのか気になるでしょ？」

黒賀は静かにうなづく

「だって、いつもみんな同じ反応をとるもの」

（いつも？みんな？）

「こことは違う世界、まあ、パラレルワールドのようだけど違う世界と言えはいかな？私はその世界から来たの」

「？ 要は異世界から来たってことか？」

「あ！そうそう、異世界って言えば良かったんだ！！」

（なんだこいつは・・・本当に）

少女は続けた

「それでね。その世界では不定期で狩獵闘技会が行われているのよ、私はその案内人の様なもので新人集めもやらされてるの」

「はい？なんつった今、闘技会？っーかお前誰だよ！！」

「え？私！？」

「お前意外に誰がいるんだ」

「ごめんね、私はサラって言うの、これからよろしくね」

「よろしくね じゃねえし、なんですでお前に付いて行くみたいな空気になつてんだよ」

「え？来ないの？」

「・・・さあな」

「つまらないんでしょう？私ときたら、ちょっとは解消されるじゃない？」

サラのこの一言で黒賀は付いていくことにした
警戒はしているが内心ワクワクしている

「じゃあ、こっち来て」

サラがそう言うとサラの足元に円形状の光が発せられた

「この光の中に入って、転送が始まるから」

「転送？」

「そう。私が住む世界であり、あなたがこれからモンスターと命を懸けて戦う世界にね」

「モンスター!？」

「もしかして怖気づいた？」

「怖気づく？ハッ！まさか、ワクワクしてんだよ」

黒賀の言葉にサラは今まで出会ってきた人達とちよつと違う気がした。もちろん黒賀のようにワクワクしてきたとか言う人もいたが、それはただの強がりであり実際には怯えがあった。サラが言った命を懸けて戦うという言葉で怯え、モンスターと対峙した時にその怯えは恐怖へと変わり体が硬直し何もできずに死んでいった。

しかし、黒賀は違う、心の底からワクワクしている、燃えている。実際この狩猟闘技会で生き残れるのは、命を懸けた戦いといわれても怯えることなくむしろ燃えてくる、そんな奴が多い、たとえば怯えという感情を抱いたとしても、モンスターと対峙した時に怯えが恐怖に変わることなく戦うことができる奴だ。

様は肝が据わっている奴や戦う根性がある奴だけが生き残れるということだ。それ以外は死ぬだけ

この狩猟闘技会は恐怖すれば死が待っており、一瞬の油断が怪我を招き下手すればこれも死が待っているという厳しい世界だ。

黒賀は円形の光の中に入った、するとその光は足元から徐々に上へと上がってくるそしてそれと一緒に体も消えていく、否、転送されていく。

転送が終わり黒賀は周りを見渡し、その光景に息を飲んだ。

この世界は黒賀の住む世界よりも技術が遥かに進歩している。バーチャルと現実が混合されたような世界という表現がいいかもしれない

「あそこを見て」

サラの指さす方を見ると他の建物よりもかなり大きい、まるでドーム球場のような建物があった

「もしかして、あれが」

「そう、あれがあなたが命を懸けて戦うところ　ハンティング・コロシウムよ」

黒賀はハンティング・コロシウムと呼ばれた建物を見つめた。

今まで感じたことのない刺激を期待して。

第貳話 説明

ここは、バーチャルと現実世界が混合されたような世界
この世界では不定期で狩猟闘技会が開催されていた

そして、ここに一組の男女のペアがいた

男の方は高校生くらいの年齢と見てとれる
女の方もまた高校生かそれ以下の年齢だろう、見た目少女と言っている
いい

この二人の様子はデートをしているという風にはあまり見えない、
何故なら男の方は周りの風景を見ていて女の方はあまり見ていない
し、女の方もそんなにくつついてもいない。どちらにせよこの二人
はカップルではないしこれから先もそういう関係にはならないだろ
う。

この二人の関係は、女は案内人及び教官、つまり教える立場であり、
男は案内され教えられる立場だからだ。

「おい、サラ、俺は今から何をやりやいいんだ？」
男が言った

「え？私について来ればいいのよ？」

サラと呼ばれたのは男と一緒にいる女だった

「ついてただけか？もうちょいちゃんと説明してほしいんだが？」

「仕方ないな、もう黒賀君ってばワガママなんだから？」

黒賀と呼ばれた男はものすごいドン引きの顔をしている

「おい、そのバカップルみたいなことやめてくれないか？。はつき
り言うが今ものすごく引いたぞ？」

「アハハハ・・・そこまで言わなくても」

サラは苦笑い

「ごめん、ふざけるのはここまでにしようか。説明するよ？いい？」

「うん、やっと説明する気になってくれたか」

「ここではさつきも言ったけど不定期で狩猟闘技会が開催されてるの、あなたはここに来る前に参加することに同意してくれたから今ここにいますわけ、すでに契約されてるわ」

「契約！？いつしたんだよ！」

「ここに転送される時に入った円形の光、あれに入った瞬間契約されたってわけ。そして下から上に向かう感じで転送されてたでしょ？あれはあなたの身長、体重、身体能力などの分析もかねてのことよ」

「ほう、ある意味プライバシーの侵害じゃないがそんな感じだな」

「仕方ないじゃない、身長とかちゃんと測らないとサイズが合う防具が分からないじゃない。それに最初に分析した身体能力値によって訓練させないといけないんだからね」

「ちよい？訓練だと？」

黒賀は訓練という単語が出てきた意味は大体予想できていたが念のために聞いた

「その訓練ってもしかして、モンスターと闘う為のか？」

「そ、理解はやくて助かるわー。まあ、正確には各種武器の基本的な扱い方とかその辺だけだね」

こんなやり取りをしているうちに目的地に到着した。とは言ってもこの世界に転送されてきた地点から見える距離ではあった。しかし以外と長めの道のりだった、何故ならこの二人の目的地は狩猟闘技会が開かれる会場、ハンティング・コロシウムと呼ばれるかなり大きなドーム状の建物だからだ。この大きさはドーム球場並、あるいはそれよりも少し大きいくらいといえる。

「近くで見るとこれまたデケー」

黒賀は呟く

「だってこの中にモンスターも入るし観客も入るんだもん、この大きさじゃないとね」

「なるほどね。で、これからどこで訓練をするんだ？」

「あそこ」

サラが指さした方を見ると、ハンティング・コロシウムから100メートルほど離れたところにまたドーム状の建物があった。その建物はハンティング・コロシウムよりは小さめだった、観客が入らないことを考えれば当たり前の大きさである

「んで？訓練ってどうするんだ？」

「まあまあ、入ってからいろいろ教えるから」

そういうとサラは入って入ってと言いながら黒賀の背中を押して入っていった。

中に入ると他にも人がいた、黒賀と同じように二人組ばかり。

「こっちきて」

サラが黒賀の手を引っ張って一つの部屋に入った

「それじゃ、説明を始めるね。まずこれを見て」

サラが立体映像を映し出す機械を使い映像を映し出した。映像には刀、銃、防具の順で映し出されていた。

「これは、あなたが使う武器と防具。まずは刀から説明するよ」

そう言うのと今度はスイッチを押した、すると刀が転送されてきた。

黒賀はそれを静かに見つめる。

「あれ？普通ここはなにかリアクションがくるんだけどな。スゲー！とか刀が出てきた！とかさ、無いの？」

「・・・いや、一度この世界まで転送されてきたし外の様子とか見てたら大体慣れたし」

「へー、でも武器に関しては何かあるでしょ？」

「いや特にはないな、武器はその映像にもあるし」

「そうなんだ、まあ、リアクションとかとられるより静かに見ても

らった方が話進めやすいからいいけどね」

こんなことを言いながらサラは思った、黒賀はきつとすごく強くなると、そしてちょっと面白くないと。

「話戻すよ、この刀の刀身はモンスターの固い肉や甲殻を切りやすくするために超速振動してるの、だから切れ味は結構あるわよ」

サラが刀を取ると刀は「シイイイイイイイイイイイ！」と静かな音を立てて振動し始めた。その音は実際に持っている人でも微かに認識できる程度だった。そして今度は鉄板を転送してきてその鉄板に刃先を軽く押し当てゆっくりと下に動かした、鉄板は少し火花を散らしながらゆっくりと切断されていた。普通のなんの変哲もない刀でここまでゆっくり切り込んでも動かすことはできない、これだけでこの刀の振動の効果は充分にわかる

「ん？てことはその振動がなくなったら切ることは不可能ってことか？」

黒賀の質問は実に的確な所をついた

「不可能に近いわね、振動してないと固い甲殻に弾かれることになるからモンスターの下にもぐって肉質の柔い腹や喉を攻撃するしかなくなるわ。切れるようにじゃなくてあくまでも切りやすくしてるだけけどね」

「振動がなくなるってこともあるってことか」

「そうゆうこと」

「どうゆうときに振動がなくなるんだ？」

「それは、刀の柄の部分に振動させる装置が付いているんだけど、それが何らかの原因で壊れたとき以外考えられないわね」

「何らかの原因？」

「いろいろあるよ、かなり強い負荷がかかった時とかね。まあ、壊れることなんて滅多にないけど」

「なんで？」

「後で分かると思う。あ、ちなみに近接戦闘武器は全部この仕組みだからね。刀以外にもダガーとか槍とかあるよ。じゃ次行くよ」

そう言う刀から銃に転送によって入れ替えられた

「銃などの中距離武器はモンスターから離れた位置から攻撃できるのが利点よ」

「弾がなくなったら？」

「その心配はほとんどないよ、弾はエネルギー体で実体弾じゃないの。武器に内造された装置で発生してるわ」

「で、その装置も壊れる心配はほとんどないとゆうことか？」

「そうゆうこと、黒賀ってホント理解はやくて助かるな、次は防具の説明ね」

今度は転送ではなく立体映像の防具をアップにして説明を始めた

「この防具は戦闘^{バトル}鎧と呼ばれているわ。素材は衝撃を吸収する特殊な金属を使ってるわ。さっきの刀や銃、その他いろんな武器にも使用されてるのよ、だから壊れる心配はほとんどないってことなの」
「なるほど、それでか。だが武器も防具も素材が一緒なら防具も壊れるってことだよな？」

「ええ、武器はちよつと違うけど防具は防具が耐えられるダメージ以上のダメージを受け続ければ壊れるわ」

「耐えられるダメージ以上？吸収できるダメージ以上ってことになる？」

「言い忘れてたけど、防具はね、さっき言った金属の他にも特殊な金属を混ぜてるの、だから吸収されるだけじゃなくて外にも逃がされるのよ。それに、防具が壊れるのは簡単に説明すると、そうだな、ガラスかな？」

「ガラス？」

「そう、ガラス。ガラスはそれぞれで差はあるけど軽く手で叩くだけじゃ割れないでしょ？」

「まあな」

「でもバットとかで殴ったら割れる、要はそれと同じなのよ」

「その説明はイメージしやすかった」

「今度は実際にやってみようわ、これ着てね」

サラが黒い全身タイツのようなものを黒賀に渡した

「んだ？これ」

「それは防具の下に着る下着のようなものよ」

渡された下着に黒賀は着替えた。下着は体にピッタリのジャストフィットサイズなのに伸縮性があり着やすく、動き難くない。さらに通気性もいい

「着替えた？」

「え？ああ、着替えた」

黒賀が返事する

「じゃあ、こつち来て」

サラについていった先には防具「バトルメイル戦闘鎧」があった。さつき映像で見たのと同じように表面には金属だからこそでる光沢を放っていてそれがまさに金属で出来た鎧だという雰囲気醸し出していた。だが見た目は重そうだった、サラが説明で見た目の割には軽いと言っていたがそうは思えなかった。

バトルメイル戦闘鎧は各パーツ（頭、胴、腕、腰、脚）一式が並べられている。

各パーツは頭、胴、腰以外は関節ごとに別けられている。さらに全パーツには必ず円の形をした物があつた

頭には耳の所に、胴には肩の所に、腕には胴とは違う位置の肩と肘と手の甲に、腰には腰骨の所に、脚には膝と踝の所にあつた。腕の肘と腰の腰骨と脚の膝と踝は関節部を左右からはさむ形となっている。

そして関節がある部分のパーツは関節ごとに別けられている、着用するのにすこし時間が掛りそうな感じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4223v/>

ハンティング

2011年11月14日21時57分発行